

令和 2 年 3 月 2 日
 鹿児島地方気象台

九州南部では記録的な暖冬となりました

- 九州南部の冬(12月～2月)の地域平均気温が統計開始以降、最も高くなりました。
 なお、奄美地方の冬の地域平均気温は2位となりました。
- 九州南部の全ての気象官署及び特別地域気象観測所で冬の平均気温が統計開始以降、最も高くなりました。

1. 九州南部の冬の地域平均気温は、統計開始(1947年冬)以降、最も高くなりました。

表1 九州南部、奄美地方の冬の平均気温が高かった年と地域平均気温平年差

	2020年	これまでの1位	これまでの2位
九州南部	+1.9	+1.5(2019年)	+1.4(1998年)
奄美地方	+1.4	+1.6(2019年)	+1.3(1973年)

2. 九州南部の全ての気象官署及び特別地域気象観測所で冬の月平均気温が統計開始以降、最も高くなりました。

表2 気象官署及び特別地域気象観測所の冬の平均気温

順位	地点名	値()	平年値()	平年差()	これまでの1位() (西暦年)	統計開始年
1	延岡	9.3	7.6	+1.7	9.0 (2019年)	1962年
1	阿久根	10.7	8.6	+2.1	10.2 (1949年)	1940年
1	鹿児島	11.5	9.6	+1.9	11.2 (1998年)	1884年
1	都城	9.1	7.0	+2.1	8.7 (2019年)	1943年
1	宮崎	10.5	8.5	+2.0	10.2 (2019年)	1887年
1	枕崎	11.7	9.7	+2.0	11.0 (2019年)	1924年
1	油津	11.4	9.7	+1.7	11.2 (1998年)	1950年
1	屋久島	14.2	12.4	+1.8	14.0 (2019年)	1938年
1	種子島	14.2	12.4	+1.8	14.1 (1998年)	1949年
2	名瀬	16.8	15.5	+1.3	17.0 (2019年)	1897年
3	沖永良部	18.3	16.9	+1.4	18.9 (1973年)	1970年

3. 記録的高温になった要因

記録的高温となった要因は、日本付近における偏西風(亜熱帯ジェット気流)が平年より北を流れたことや正の北極振動などにより、寒気の南下が弱く、冬型の気圧配置が続かなかったことが考えられます。また背景として地球温暖化の影響も考えられます(別紙参照)。

問合せ先：鹿児島地方気象台 季節予報担当
 電話 099-250-9912 FAX 099-255-4234

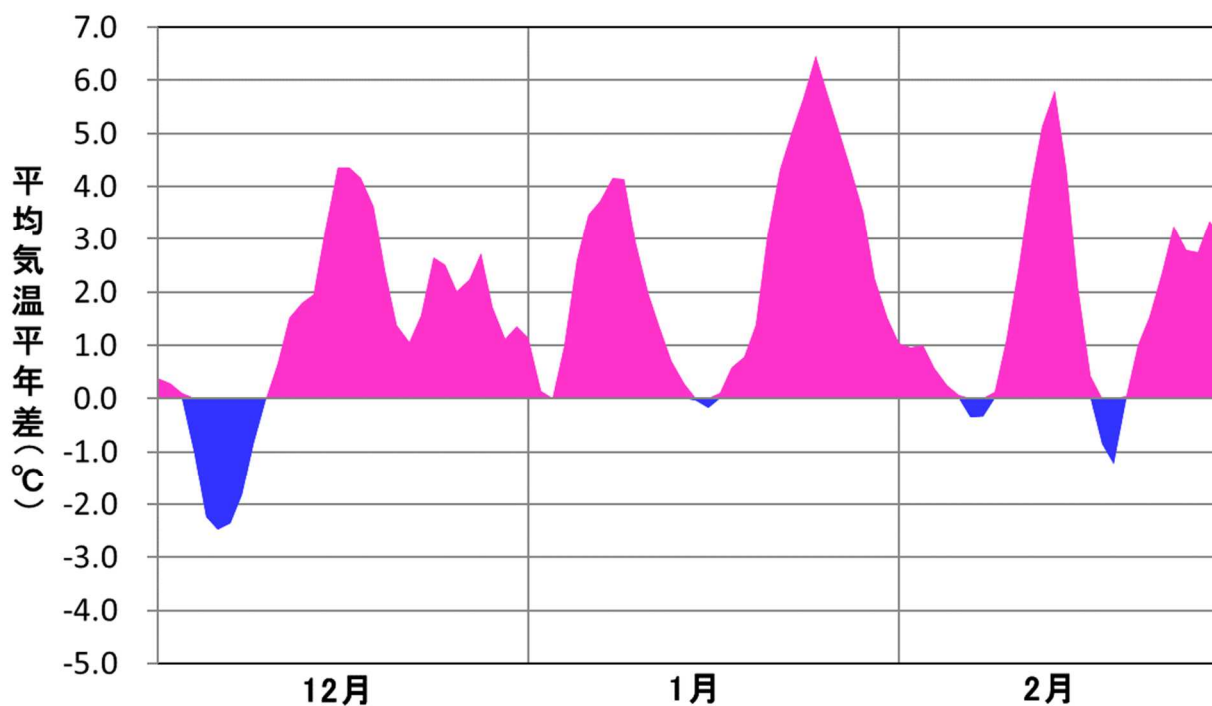


図1 九州南部の地域平均気温平年差の時系列（5日移動平均値）
（2019年12月～2020年2月）

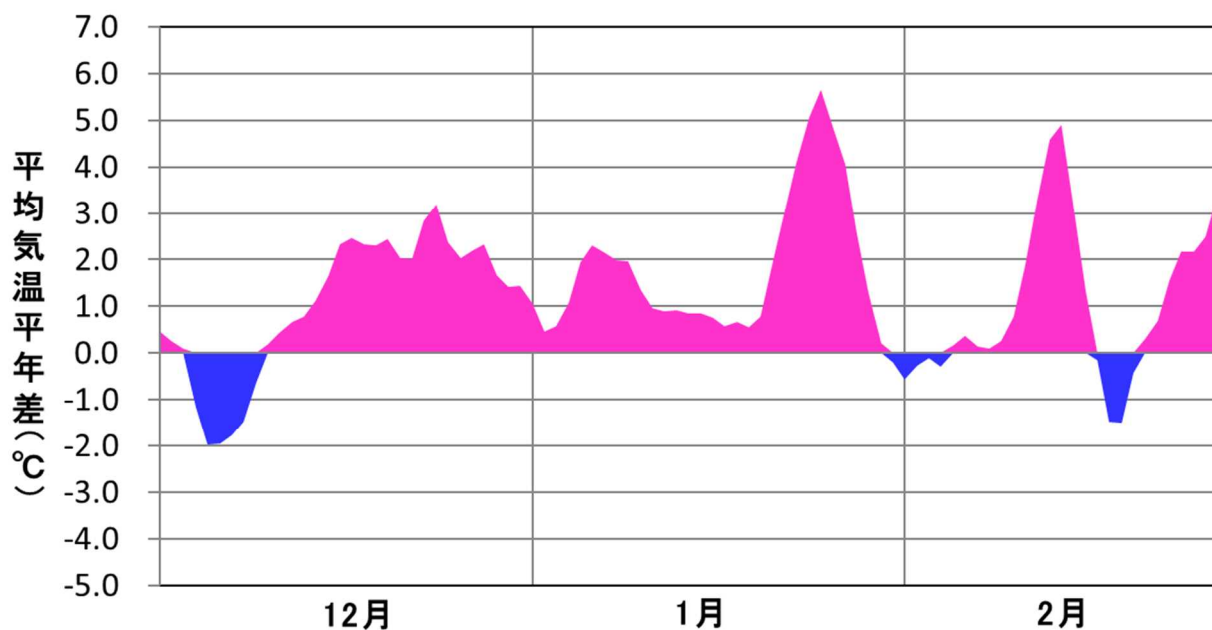


図2 奄美地方の地域平均気温平年差の時系列（5日移動平均値）
（2019年12月～2020年2月）

地域平均気温平年差は、いつもの年（平年）と比べてどのくらい暖かい・寒いかを地域全体でみるもので、九州南部は9地点、奄美地方は2地点における気温の平年差を平均して算出しています。

気温が高かった要因

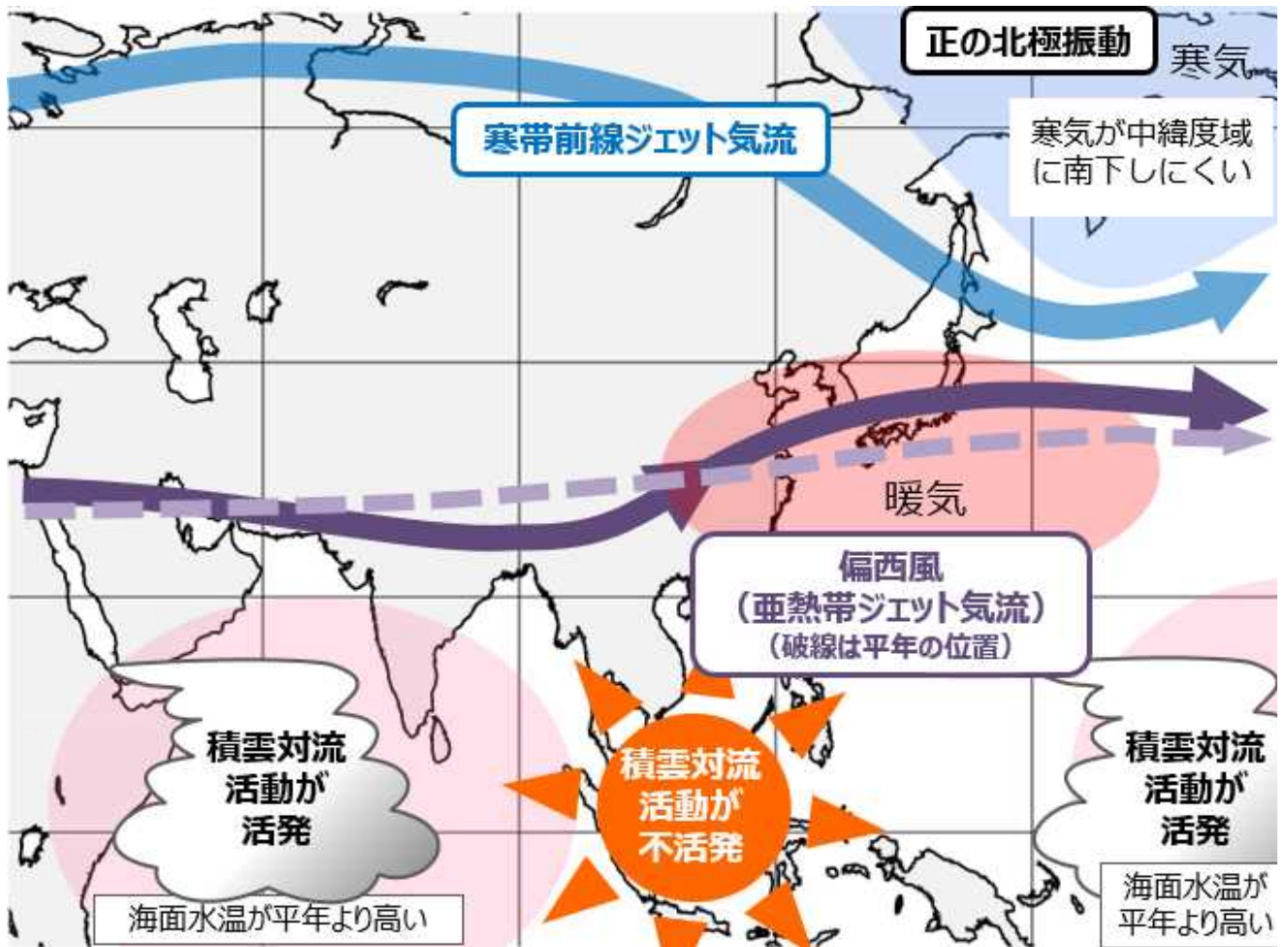


図3 2020年冬の平均的な大気の流れの模式図

- 日本付近では偏西風が北寄りを流れ、東・西日本を中心に全国的に暖かい空気に覆われました。
- シベリア高気圧の張り出しは南ほど弱いほか、アリューシャン低気圧も平年より弱くなり、日本付近では冬型の気圧配置が続かず寒気の南下が弱くなりました。
- 偏西風（亜熱帯ジェット気流）の蛇行には、インド洋西部や太平洋赤道域の日付変更線付近で対流活動活発な一方、インド洋東部～インドネシア付近で対流活動不活発となったことが関連しているとみられます。
- この対流活動の偏りには、熱帯の海面水温が、インド洋や太平洋赤道域の日付変更線付近で平年より高いことが関連しているとみられます。
- 寒帯前線ジェット気流はユーラシア大陸東部ではバイカル湖の北から沿海州付近で明瞭となり、東シベリア付近の寒気は平年よりも弱くなりました。
- 「正の北極振動」が明瞭となり寒気が中緯度域に南下しにくくなりました。

「正の北極振動」とは、北極域の海面気圧が平年より低く、中緯度域の海面気圧が平年よりも高くなる現象です。